

シリーズ1、病虫害等による庭木の被害とその対策(4)

一庭木の松類を守る：病虫害以外の原因による枯れ一

富山県林業技術センター林業試験場
中山間地域資源課長 西村 正史

松は日本を代表する樹木であり、庭木の代表的な樹木でもあります(写真-1)。これまで、庭木の松が変色したり、元気がなくなったりなどして、試験場に持ち込まれた相談の中には病虫害が原因でなかったケースが、度々ありました。そのような場合、現地へ出かけて、庭木を見させて頂くと、松全体の勢いがなく、ここ数年来の枝の伸びも悪い状況で、枝の一部が枯れたり、甚だしい場合には衰弱してほとんど枯損状態に近かったりする松が大半でした。今回はこのような状況になった原因の代表的な事例をいくつか紹介したいと思います。

強度剪定による枯損

庭木の松では、その形を美しく整えながら、適正な大きさに維持していくために、剪定という作業を行います。この作業が適正に行われておればよいのですが、時として強度剪定になることがあります。松は枝を切断してしまうと、広葉樹のように再度枝が再生するようなことはありません。そのため、剪定で当年枝をすべて切断すると、翌年は新芽がでてこないで、その枝は衰弱し枯れる運命にあります。剪定では必ず一部の当年枝を残すことが大切です。

剪定の際、通常の剪定をしたとしても、松の樹勢がよくなかったり、マツカレハなどの食葉性害虫の被害によって葉が少なくなっていたりすると、枝枯れを起こす場合がありますので、注意してください。

盛土による枯損

庭園を少しでも良くしようとして盛土をされる場合があります。20~30cmの深さの盛土をされると、根は締め付けられて衰弱し、水を吸い上げることができなくなり、枯死に至る可能性が非常に高くなります。庭園に土を入れる目的は土壌改良であると思います。そのような

場合は堆肥等を既存の土壤にすきこむようにしてください。

新規住宅地における松の枯損

新たに宅地造成地に新居をかまえ、松を含む庭木を植栽したが、5~10年経過した頃に樹勢が衰え始め、枯れる樹木も出現したという相談を受けたことがあります。

これは宅地造成時に重機で地盤を堅くしめた土地に、庭園を作った際にその上に盛土をして樹木を植栽したためです。植栽時は樹木が小さいので、根は盛土の部分で生活していますが、大きくなると、根は重機でかためられた部分へ侵入しようとしませんが、堅いため侵入できなかったり、水が停滞している場合には根が腐ったりして、根の成長が著しく衰弱します。そのため、樹木は徐々に衰弱していくのです。

このような場合には、堅くしめつけられた部分を耕し、堆肥等も加えて盛土と混和して、できるだけ深くし、根の伸長範囲を深くすることが大切です、さらに、暗渠排水を行えばさらにより結果が得られます。



写真-1 庭園に植栽されたている松